

# 一隅を照らす

2020年7月9日(木)

校長 田沢 幸夫

京都の比叡山延暦寺は、日本天台宗の総本山で、約1200年前に最澄が開いたものです。私はこの寺を何度か訪れたことがあります。山奥の修行の場という印象を受けました。この寺から親鸞、道元、日蓮など、多くの仏教者が輩出しています。

最澄が修行をしながら後輩に残した言葉で、「一隅（いちぐう）を照らす」という言葉があります。「一隅」とは一つの隅（すみ）、身近な場を意味します。自分が置かれた場、身近な人を照らすような人になりなさいと最澄は教えているのです。「金貨が十枚あっても、これは国宝ではない。一隅を照らす人が国宝である」と彼は言っています。一隅を照らす、その実践の三つの柱は「生命・奉仕・共生」です。あらゆる命を大切に。見返りを求めずに奉仕する。感謝の心をもって共に生きる。これらのことを具体的な実践に移すということです。

さて、わたしたちも身近な場で、家庭や学校、あるいは通学路で、まわりを照らすような行動をとりたいものです。ちょっとした思いやりの言葉や動作が、その場を明るくする光となります。身近なところを照らすことが、社会全体、世界を明るくすることにつながります。これは、まさしく本校が大切にしている「世の光」のことを表していると思います。